

2021年(令和3年)3月29日(月曜日)

CE研究の最前線

レアメタル資源再生技術研究会

ウェブ講演会を開催

レアメタル資源循環に関わる産官学の関係者でつくるレアメタル資源再生技術研究会(岐阜県各務原市、藤田豊久会長)は3月18日、第20回となる講演会を開催した。新型コロナウイルス感染症対策として、オンラインで開催。参加者はサーキュラー・エコノミー(循環経済/CE)の国内外の最新動向について、3人の講師の発表と討論を通して知見を深めた。

講演に先だつてあいさつした藤田会長は「今回で講演会も20回を数え、会としても設立から10年を過ぎ、取り扱うテーマもレアメタルのリサイクル技術から、より大きな社会システムへと発展しており、より深い議論をする場としての成長を感じている。今回は討論の時間も用意しているの、活発な意見のやり取りを期待したい」と述べた。

社)サステイナビリティ技術設計機構の原田幸明氏が「サーキュラーエコノミーとは何か?—日本の静脈産業の役割—」をテーマに発表した。氏はCEが登場してきた動機として、気候変動・生物多様性・資源安定提供の三つへの危機に対して、「改善」ではなく「変革」に投資する方向へ世界が舵を切ったと説明。CEは製品から多重に価値を引き出すことが重要と述べた

うえて、それを一企業で達成することが不可能だからこそ、横断的なビジネスとして組み上げていくことが重要だと指摘した。

続いては、東北大学名誉教授の中村崇氏が「サーキュラーエコノミーの課題と今後の方角性—日本と欧州の資源リサイクルの得意・不得意」として講演。CEの国際標準化を議論するISO/TC323の国内委員会の委員長でもある氏は、同委員会での議論の進捗とポイントを紹介。また、日欧のリサイクル技術の違いを説明し、今後の標準化のなかでデジタルトランスフォーメーション(DX)が重要な要素になると

指摘した。

さらに、オランダ・ライデン大学のアーノルド・トゥッカー氏が「EUのサーキュラーエコノミー」最近の政策イニシアチフと資源効率の傾向—」について講演した。EUがCEを打ち出す動機として、資源供給面で欧州が脆弱である点を指摘。だからこそ循環性の高い社会への移行を少しでも早く始める必要があると強調し、EUのCE新行動計画の特徴を解説した。

講演の後には、講師と参加者を交えた総合討論も実施。CEに対する疑問や論点などについて意見を交わした。

最初の講演では(一)